

## 昭和36年度オ7次平城宮跡発掘調査概要

特別史跡「平城宮跡」のオ7次発掘調査は、昭和36年7月12日より始め、10月4日に調査を終了して、以後埋め戻し作業を行つたが、現在は作業を中断せられてゐる。

今回調査した地域は、奈良市佐紀町寺前に属して通称一条通の北側にあり、オ5次及びオ6次で発掘調査した地区の東南に接する。この部分は水堀を三枚並べた東西に細長い地域で、総面積は32アールである。

「発掘遺構」 この地域から、建物20棟・門1棟・柵4条・溝2条・井戸2基の29遺構を検出した。これら遺構の規模と配置についてはオ2・3表に示した通りであるが、遺構は相互に重複しているため、層位と掘立柱の柱穴の切り合ひ関係とを検討して、その先後が判定された。これをオ4・5次発掘調査の成果(奈良国立文化財研究所年報1961所収)と対比しながら記すと、次の通りである。

(「」はオ5次調査における期別を表わす。)

Ⅰ期「オⅠ期」 この時期は、現調査地域に建物が造られた最初の時で、発掘地域の西半に厚さ5cm位の土盛りを行つて整地した後、205・317の建物と269の門が造営された。

Ⅱ期「オⅡ期」

Ⅱ期の後で、この地域一帯に広く盛土を行い、多くの建物が造られ

た。それらの遺構は柱穴の重なり工合や遺構相互の配置関係によって、c・dの3時期に区分される。b期は建物200・溝130と、272・311の井戸のcⅠ次造管が行われた。井戸311では、このcⅠ次井戸の底の礫敷面上から奈良時代末期の土器・木製品類と共に百年通宝銭・神功開宝銭を発見したが、これはこの井戸を便用した下限を示すものと考之られる。

c期「cⅤ期」 201・206・243・249の各建物が造られた。建物の規模が大きく、また数も増えて、全体が整然と配置されているが、この期の特色である。

d期「cⅥ期」 273・285・314・321の各建物と柵276の造管された時期で、c期にくらべ個々の建物の規模は縮小した。

e期「cⅦ期」 d期の建物群廃絶後に、発掘地域の東部から東南部にかけてと西端に土盛りを行い、233と303の2条の南北に伸びた柵列と南辺を東西に走る溝<sup>267</sup>が造管された時期である。2列の柵間の距離は45.9mを計る。また井戸272・311のcⅡ次造管もこの時期に行われたと考之られる。井戸311ではcⅠ次井戸枠を下2段を残して取りはがし、やや小さな井戸枠を組み上げて、cⅡ次井戸をその内側に造っている。その底から多量の土器・木製品類とともに隆平永宝銭を検出した。また、井戸272はcⅠ次井戸枠を完全に取りはがし、一部に旧材を使って新らたに造り直されたも

のであるが、そのオニ次井戸底に近い堆積土中からも土器、木製物品とともに承和昌宝  
銭が出土している。

ナ期 井戸 272・311 のオニ次造作のなされた時期であるが、両井戸共にオニ次井  
戸においては瓦器・土釜等の出土をみるから、平城宮廢絶後の時期に屈する  
ことが明らかである。

〔遺物〕 特勤すべきものは

井戸311では、オニ次井戸底面上より出土した万牟通宝銭・神功南宝銭各  
3点、刀子1点、錐1点、須恵器・土師器・屋瓦類、木製人型1点、漆器1  
点、横櫛2点等がある。土師器の中には「美所」と墨書のある土甕や蔓製  
の釣手を有する土器がある。木製人型は全長15.2cm、幅2.6cm、厚さ0.4cmの長方形  
の板を人形型加工したもので、頭部には墨で顔が描かれ、両目と胸部中央に  
竹釘が打ち込まれている。この井戸311のオニ次井戸の底からは、隆平永宝銭  
1点のほか、緑釉陶器・須恵器・土師器、黒色土器などの多量の土器類、木筒  
2点、横櫛10点、木製陽物1点と曲物の桶、杓子等の木製品類、土馬2点等  
が出土した。土器の中には人面の描かれた土師器皿のほか、10点以上の墨書ある  
ものを含む。

また、井戸272においてもオニ次井戸内部の堆積土中より、承和昌宝1点、木

製板のある鎌1点、錐1点、墨書土器をふくむ多量の土器類や、横櫛21点のほかに多数の木製品等が出土した。なお、これら遺物に伴つて兩井戸とも各期毎に樹枝、木葉、種子などの多量の有機質の遺物がある。

一方、全地域より屋瓦片、土器片が出土しているが、その量はあまり多くはなく見るべきものも少ない。

〔総括〕以上、今次調査の概要を記述したが、このうち2基の井戸が奈良時代末に一旦放棄されたから、平城時代初期にかなり大規模に改造されて再使用された点は注目されてよい。この改造は出土遺物から推定しうる時期や遺構の規模から考之て、おそらく平城上皇の平城遷都の計画と、上皇御所の造営に關係あるものとみられる。つまり、今回の調査により、はじめて平城上皇と關連あると考之られる造営の一端が明確となつたのである。このことは、5次調査で発見した天平宮字銘の木簡と相まつて、平城宮跡の遺構群の実年代を推定し得る新たな手かりを得た点で、その持つ意義は大いである。また、井戸川より発見した土師器「甕」にみられる墨書銘「美所」は、現在の調査地域を大膳取跡の一画と想定した、5次発掘調査の際の推定を裏付けるものと云える。

なお、今次発掘調査地の埋め戻し作業中に地元町民が発掘に対する協力と、就労を拒否したため埋め戻しの完了を見ぬまま、全く作業の中断を行わねばならなくなり、今後の調査計画全体にも大きな支障をきたした。このことは、平城宮城西南部に多る米指定地の買収計画から見て、指定地内における土地所有者の利益に対する不満が表面化して、問題の解決が長引く結果となった。今後、発掘調査を円滑に進めるためには、早急に平城宮跡全体に關する高度な保護対策を確立し、地元側の理解と協力を得ることが絶対に必要であるし、また、そのためにも関係各方面は勿論、国民一般に対しても平城宮跡の日本文化史上にもつ意義とその重要性を強調すべきであると思考する。

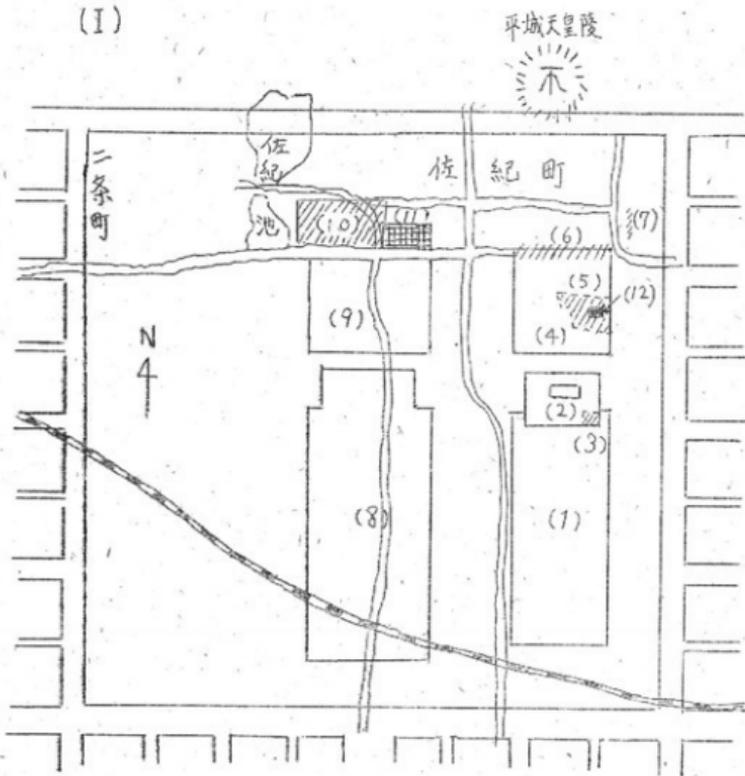
(II) 才VII次調査検出遺構

遺構番号

- 130 石敷の溝 才II・IV・V次調査で検出したもの東への連絡部分
- 200 4×7向東西横四面庇建物 12×21m 柱向3m等向(V)
- 201 5×7向東西横南北庇 南庇庇建物 15.6×21m 柱向3m 須庇3.6m (V)
- 205 2×7向南北棟建物 6×21m 柱向3m等向 (V)
- 206 2×7向南北棟建物 6×21m 柱向3m等向 (V)
- 233 南北柵 柱向3m等向 (V)
- 267 東流子3溝
- 268 2×3向東西棟建物 5.1×76.5m 柱向2.55m等向
- 269 門 柱向4.5m
- 272 井戸 掘りかた東西6m・南北5m 3回の造作あり。才I次井戸構遺存せず。  
才II次井戸構は、方形せいろ組 木枠4段遺存 内法1.8m×1.8m。  
才III次井戸構なし。
- 273 1×5向東西棟建物 3.3×13.5m 梁行柱向各3.3m 桁行柱向各2.7m
- 276 東西柵 柱向2.7m等向
- 285 3×5向南北棟東庇建物 9.3×15m 柱向3m等向 庇柱向3.3m
- 293 3×7向南北棟建物 7.2×21m 梁行柱向各2.4m 桁行柱向各3m
- 297 3×3向建物 柱向1.5m等向
- 299 東西2向で南棟と交えらるる建物の南葺部分 柱向3m等向
- 302 2×3向建物 4.2×3.6m
- 304 南北柵 柱向3m等向
- 307 3×3向南庇建物 6.6×4.8m 柱向桁行各1.6m 梁行各1.8m 庇3m
- 308 3×3向南庇建物 6.6×4.8m 柱向桁行各1.6m 梁行各1.8m 庇3m
- 311 井戸 掘りかた東西7m 南北7m 3回の造作あり。才I次井戸構は方形せいろ組木枠2段遺存 内法2.25×2.25m。才II次井戸構は方形せいろ組木枠1段遺存 内法2.0×2.0m。才III次井戸構遺存せず。
- 314 2×5向東西棟建物 4.2×10.5m 柱向2.1m等向
- 317 桁行7向 柱向3m等向の東西棟建物 南側柱列のみ検出
- 318 東面2向 柱向3m等向の南北棟建物 南側柱列のみ検出
- 320 柱向3mの建物の東北隅部分
- 321 2×7向東面棟建物 4.2×16.8m 梁行柱向各2.1m 桁行柱向各2.4m
- 322 柵列 柱向各1.6m
- 323 2×3向南北棟建物 4.2×5.4m 梁行柱向各2.1m 桁行柱向各1.8m
- 327 3×6向東西棟・南東庇建物 8.4×14.7m 身舎柱向2.4m等向 南庇3.6m 東庇2.7m

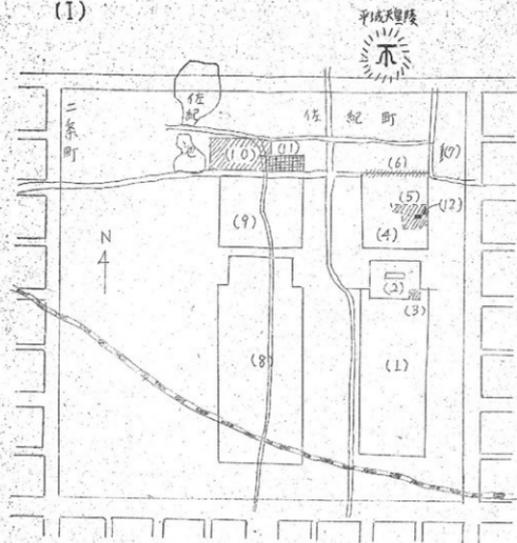
註 (V)は才IV次調査地境の一部検出済のもの

(I)



- |               |                   |
|---------------|-------------------|
| 1. 朝堂院跡       | 7. 昭和3年発掘地域       |
| 2. 大極殿跡       | 8. 南苑跡? (才1次朝堂院跡) |
| 3. 才1次発掘地域    | 9. 才1次内裏跡         |
| 4. 内裏跡        | 10. 才2・4・5・6次発掘地域 |
| 5. 才3・6次発掘地域  | 11. 才7次発掘地域       |
| 6. 昭和29年度発掘地域 | 12. 平城宮発掘事務所      |

(I)



- |               |                   |
|---------------|-------------------|
| 1. 朝堂院跡       | 7. 昭和3年発掘地域       |
| 2. 大極殿跡       | 8. 南苑跡? (元朝堂院跡)   |
| 3. 元1次発掘地域    | 9. 元一次内裏跡         |
| 4. 内裏跡        | 10. 元2・4・5・6次発掘地域 |
| 5. 元3・6次発掘地域  | 11. 元7次(現)発掘地域    |
| 6. 昭和29年度発掘地域 | 12. 平城宮発掘事△所      |

(II) 元VII次(現)調査検出遺構

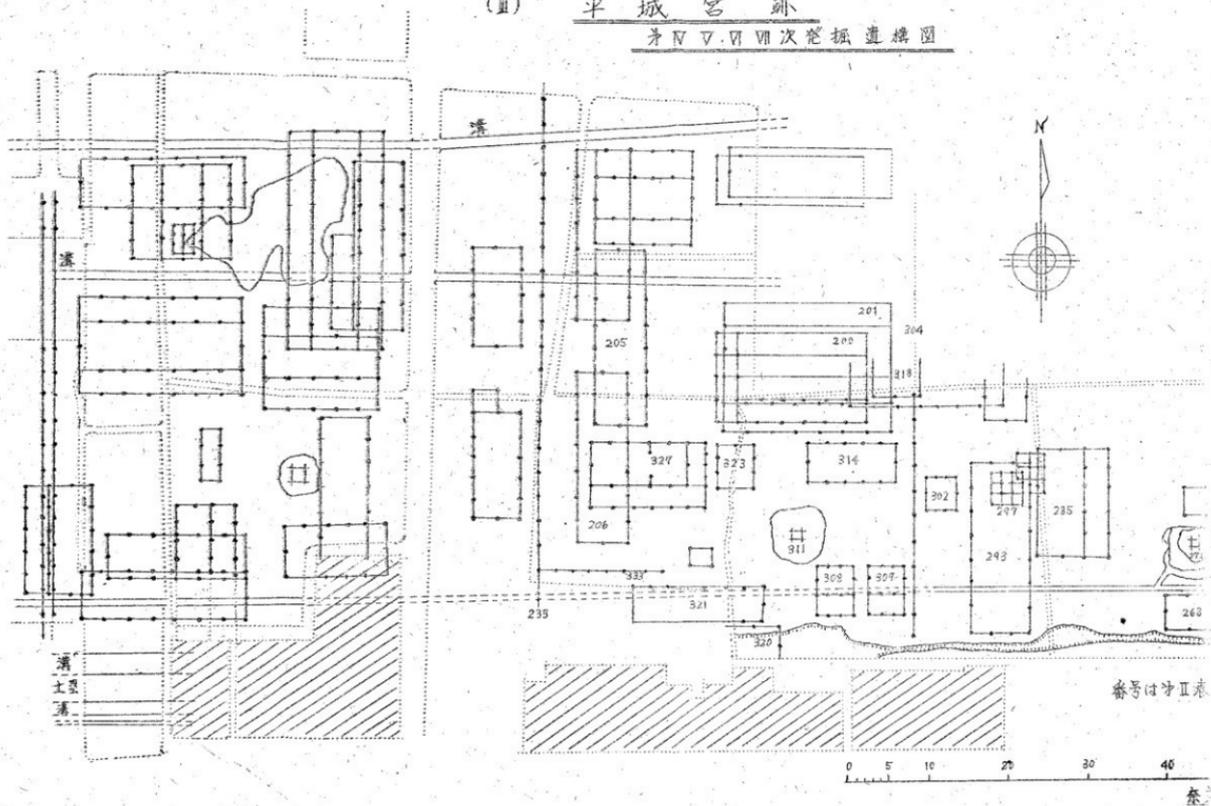
遺構番号

- 130 石敷の溝 元II-VI次調査の検出されたもの東へ向建部分
- 200 4×7間東西棟四脚屋建 12×21m 柱間3m等間 (V)
- 201 5×7間東西棟南北柱・南棟柱建 15.6×21m 柱間3m 桷長3.6m (V)
- 205 2×7間南北棟建 6×21m 柱間3m等間 (V)
- 206 2×7間南北棟建 6×21m 柱間3m等間 (V)
- 233 南北軒 柱間3m等間 (V)
- 267 東流有3溝
- 268 2×3間東西棟建 5.1×76.5m 柱間2.5m等間
- 269 門 柱間4.5m
- 272 井戸 掘り口は東西6m 南北5m
- 273 1×5間 東西棟建 3.3×13.3m 梁行柱間各3.3m 桷桁柱間各2.7m
- 276 東西冊 柱間2.7m等間
- 285 2.5間南北棟東廡建 9.3×15m 柱間3m等間 庇柱間3.3m
- 293 3×7間南北棟建 7.2×21m 梁行柱間各2.4m 梁行柱間各3m
- 297 3×3間建 柱間1.5m等間
- 299 東西2冊 南北棟と表之り建物の南端部分 柱間3m等間
- 302 2×3間建 4.2×3.6m
- 304 南北冊 柱間3m等間
- 307, 308 3×3間南北建 6.6×4.8m 柱間桁間各1.6m 梁行柱間各3m
- 311 井戸 掘り口は東西7m 南北9m
- 314 2×5間東西棟建 4.2×10.5m 柱間2.1m等間
- 317 桁行7間柱間3m等間の東西棟建の南側柱列の2桁分
- 318 東西2間柱間3m等間の南北棟建の南端柱列の1桁分
- 320 柱間3mの建物の東北隅部分
- 321 2×7間東西棟建 6.2×18m 梁行柱間各2.1m 梁行柱間各2.4m
- 322 桁行2間 柱間各1.6m
- 323 2×3間南北棟建 4.2×5.4m 梁行柱間各2.1m 桁行柱間各1.8m
- 327 3×6間東西棟南東廡建 8.4×14.7m 梁行柱間各2.4m等間 桷長3.6m 東庇2.7m

註 (V)は元V次調査地域で一部検出済のもの

(四) 平城宮跡

才凡V.VI.VII次発掘遺構図



# 平城宮跡

第4・5・6・7・8次発掘遺構図

